
毎日三枚小説『エイプリルフールに真実を』

藍田いづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毎日三枚小説『エイプリルフールに真実を』

【Zコード】

Z96091

【作者名】

藍田いづる

【あらすじ】

テニスの大会当日。僕の友人は嘘をついた。

「俺実はさもうすぐ引越すんだよね。言ってなかつたんだけど」
大会に向かうバスの中で、パートナーの弘道はそんな嘘を付いた。
本来なら四月一日は学校の始業式の日で、まともに嘘を付いている
暇はない。

新しいクラスで新しい生徒と仲良くなるのに嘘はいらないからだ。
でも今日はソフトテニスの地区大会で、僕もちょうど嘘を考えてい
た所だった。僕はワザとらしく目を逸らし、窓の外を見ながら言つ
た。

「実はさ俺も引つ越すんだよ。親父が転勤になつてさ。新潟まで行
かないといけないんだ」

「お前も今日がエイプリルフールだつて判つてたのかよ」
落胆ぎみの声が聞こえてきた。僕は笑つた。

「そういう事だ。まあ今日はさ。嘘みたいな勝ち方してやろうぜ」
でも初戦から優勝候補の登場だつた。うちの町から隣あつた町に
ある。江越中だ。昔は僕の通つている中学と同じ位だつたのに、僕
らが中学校に入つてから強くなつた。もちろん何回も練習試合をし
て、その度にぼろ負けさせられた相手だつた。

全員が集まつた中で、団体戦のメンバーが発表される。通常僕は
三番手だつた。一番手二番手が僕より強いと思つてはいなかつたが、
先生が変わつてから毎回そつだつた。

「大島・取手。お前らが一番手だ」

先生は僕らに笑顔を向けた。信じられなかつたが嬉しかつた。

「俺は江越中はライバルだと思っている。お前らが一勝あげて楽に
しろよ」

「はい」

僕と取手は同じタイミングで答えた。
勝つしかない。でも壁は厚かつた。

「アドバンテージレシーバー」

審判がそう言つて相手側のコートを手の平で差した。試合は3ゲーム取られたら負けだ。そのうちもう2ゲーム、しかもあと1点取られたらもうゲームオーバー。僕はボールを一つ握り床に弾ませる。相手が対角線ばかりに打つてくるので相当走らされた。何とか息を整える。監督に呼ばれて僕と道弘は先生の目の前に立つた。先生は穏やかな顔で言った。

「お前に何が足りないか判つただろう? お前らを一番手にした理由もな」「な

要するに僕が努力不足で、一番手は元から捨てていると言いたいのだろう。僕は歯を食いしばった。他の奴は、先生がいる前だけで頑張っているだけだ。僕は歯を食いしばって込み上げてくる怒りに堪えた。取手に背を叩かれた。無言の表情が相手はそつちじやないといつている。

試合が再開して僕はボールを持った。ボールを地面に弾ませて呼吸を取る。サーブを始める一瞬。動き始める前はやっぱり緊張する。一投目はネットに掛かった。僕はまた地面にボールを弾ませる。

「なあ」

僕の集中をいきなり弘道は妨げた。

「俺、引っ越すって言つたの。嘘、じゃないぜ」
視線を合わせず、道弘は言った。

「は? 何言つてんだよ」

「もちろん栄転なんてのは嘘だ。神奈川支社の業績が悪いから閉鎖するんだって」

特に気持ちなんかこもつてない。棒読みの台本みたいな口調だった。

「そこ、試合に集中して」

主審から注意を受ける。僕は頭がパニックになつていた。

「だから、絶対一泡吹かせてやれよ」

ぎゅっとラケットを握る手が汗ばんだ。一年間一緒だつた道弘が本当に引っ越してしまうとは思えなかつた。しかも、新学期といえば、

今日からだ。大会が終われば居なくなるってことなのか？

僕は半信半疑のまま、ボールをとんとんと弾ませる。ボールを天高く投げ、僕は手首を思い切りスナップさせる。

ボールがラケットに当たった瞬間。僕は生まれてはじめて、これが連動したサーブなんだと思った。

ラケットを構えてレシーブが来るのに備える。しかしほぼはラインのギリギリの所で跳ねて、そのまま外に向けた。副審を凝視する。手を平行に伸ばしライン内に入っていた事を告げる。デュースだ。これで二連続決まれば僕らがゲームを取る。

もちろん安心なんか出来ないが僕は絶対県大会まで道弘を道すれにしてやろうと思った。

(後書き)

ちょっとシンプル気味で、中々更新出来なくてすみません。
頂きありがとうございました。 読んで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9609i/>

毎日三枚小説『エイプリルフールに真実を』

2010年10月19日01時58分発行